

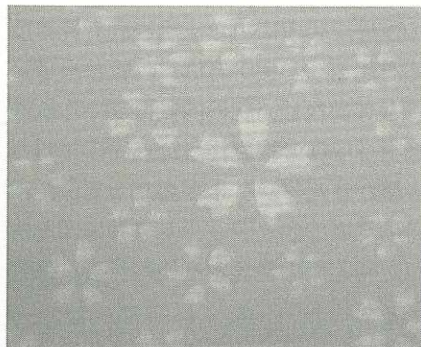
雅楽を支える鶺殿のヨシで紙作り ピンポイントで透かしも

山田兄弟製紙(株)

福井県越前市地域で1500年の歴史を持つ「越前和紙」。江戸時代には日本初の和紙の通貨「藩札」が製造されたりと、高品質な和紙を作り続け、現在も和紙の生産地として知られている。特に、紙を光に透かしてみると文字や絵柄が浮かび上がる伝統的な「透かし」技術を生かして、近年では主に株券・債権・証券などに使用されてきた。しかし、株券の電子化などにより和紙の需要は減少傾向にあり、新たなビジネス展開が求められている。こうした中、河川周辺などの湿地帯に生息する植物、ヨシ（葦）を使って紙が作れないかと持ちかけられたことから、山田兄弟製紙(株)（山田晃裕社長、福井県越前市不老町15-4、TEL.0778-43-0043、<http://yamada-keitei.com/>）では、10年程前から大阪府高槻市の淀川のほとりにある鶺殿のヨシを使用した「ヨシ紙」の抄造、商品化に取り組んでいる。

（江口 祐子）

ヨシは、土中や水中の窒素やリンなどを吸収し、アオコの発生などを抑制する水質浄化作用がある。しかし、1年で立ち枯れしてしまうため、放置しておけば再び吸収した窒素やリンが水中などに戻ってしまう。これを防ぐため、毎年2月、鶺殿のヨシ原の保全や環境活動に取り組むボランティアや企業によって刈り取り作業が行われているが、長さ2.5km、最大幅400m、



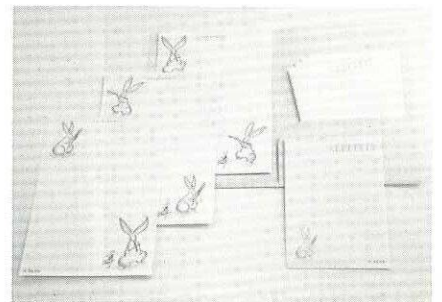
「透かし」を用いた越前和紙

75haと広大な面積があり、さらに成長したヨシは4～5mの背丈に成長するため、刈り取るだけでも大変な作業だ。鶺殿のヨシは、雅楽の筆簾のリード（蘆舌）に使用されていることでも知られており、現在も宮内庁の筆簾奏者に使用されている。

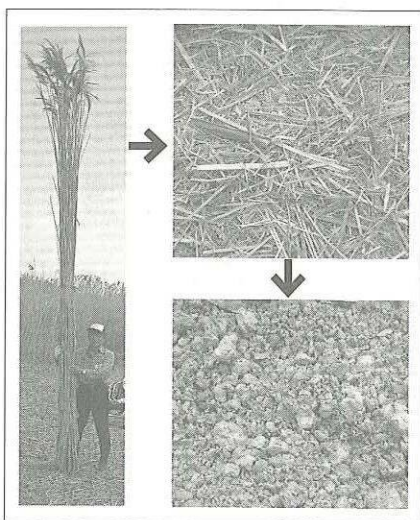
ここで刈り取ったヨシを有効活用してできたのが同社の「ヨシ紙」。刈り取ったヨシを乾燥させた後、粉碎、加工してできたヨシパルプとその他の原料を配合し、抄造する。繊維の短いヨシパルプでの紙作りは難しいとされる中、和紙での抄造ノウハウを生かしたヨシ紙の製造に成功した。また、越前

和紙の透かし技術を生かし、他の紙との差別化も図れる。透かしは、文字や絵柄の一部が透けて見えるように、透かしたい部分だけ繊維を少なくする技術。意匠性のみならず、文書や証書などに透かしを入れることでセキュリティ効果も発揮する。ヨシ紙を使うことで、ヨシ原保全や水質浄化など環境配慮型の商品としてのメリットは多いものの、「開発から5～6年は全く売れませんでした」と山田社長。「3年程前にコクヨさんに声を掛けていただき、ようやく始めてきたところですよ」と話す。環境意識の高まる中、風向きも随分と変わってきょうで今後の動きに期待がかかる。

現在の商品ラインアップは、ヨシパルプを30%配合した菊判横目、A3判、A4判サイズの内紙から120×235mmサイズの封筒、91×55mmサイズの名刺用紙などで、非木材グリーン協会の認定を受けている。印刷は、インクジェットやレーザープリント、オフセット印刷多色刷りに対応。また、オーダーも受けており、特定の位置に企業名や絵柄などの透かしを入れたオリジナルの紙も抄造できる。



ヨシ紙を使った商品



刈り取ったヨシを粉碎してパルプに